

お祭り

校長 山田 浩之

私事で恐縮なのですが、私の妻は、毎年、七月七日前後に実家のある村上市に帰ります。七月七日は、村上大祭が行われる日です。その日が近づいてくると、どうしても行きたくなるようなのです。確かに、三味線や太鼓、かね、笛の響きが生み出す情緒と豪華絢爛な屋台（おしゃぎりなど）は、その謂れを知らない者をも惹きつけます。妻も、子どもの頃、その屋台を引っ張り、お祭りに携わっていました。

私はというと、新潟市で育ちましたが、新潟まつりとかかわりがほとんどない地域でしたので、新潟まつりと言えば、「川びらき」と言っていた花火大会しか知りませんでした。ですから、お祭りとは、参加するものではなく、見て楽しむだけのものでした。

今年は新型コロナウイルス感染症後、希望者による行列への参加が再開されました。民謡流しも昨年に引き続きPTA主催で行われました。万代太鼓部も、お祭り広場で、その腕前を披露しました。どれも、子どもが大人と一緒になっつて、お祭りを楽しむことができました。別の言い方をすれば、子どもたちが、お祭りをする側、多くの人に見られる側に立つことを楽しんだのです。久しぶりの行列に参加した子ども

たちは、暑さと待ち時間の長さから、結構疲れていたことと思います。それでも子どもみこしをかついで（持つて？）「わっしょい、わっしょい」と掛け声をかけながら古町通りを練り歩き、たくさんの人から拍手を送られ、喜ばれました。子どもたちは、その場でしか感じられない高揚感を味わうとともに、地域の一員であることを実感したことと思います。

学校では、地域を知り、地域の課題や未来について考える学習を行っています。それは、自らの地域を客観的にとらえたり、主体的に考えたりするとても大切な学習です。それに対して、お祭りは、より一層地域と一体となっながら、それを見ている地域の人も楽しむ、そんな活動です。

現代の個人消費社会において人との豊かな関係性を育む場は、限られています。まして、子どもが、大人と一緒に文化を担う機会は、貴重です。私自身は、子ども時代に経験できなかったことなので、今年の新潟まつりに参加した子どもたちを羨ましいと思いました。そして、地域への愛着を高めたのではないかと考えています。